



再びの「備えあれば憂いなし」・・・

自分がこの四箇郷に赴任してきたのが11年前。そのときのことを今でも覚えています。単なる思い出話ではありません。新型インフルエンザのことです。なにぶん一昔前のことでもあり、記憶も薄れている方も多いかと思いますので、振り返ってみましょう。

I. はじめに

2009年4月にメキシコで発生し、世界に広がった新型インフルエンザA(H1N1)は、結果的には通常の「季節性インフルエンザ」レベルと判断され収束したものの、その過程では行政・企業・市民等で多くの混乱が見られた。混乱の中には、地域経済に大きな打撃を与えた他、人権侵害と思える事例も散見された。あれから10年を迎える。この1月、季節性インフルエンザが過去20年間で最多の患者数を更新したと報道されるなど、注意の呼びかけはなされているものの、かかってから「まさか、私が・・・」という人も多く、必ずしも健康危機管理への意識が醸成されているとはいえない。世界的にみれば、私達が認識していない感染症がいつ発生してもおかしくない状況とも言われている。改めて10年前を振り返り、発生時に冷静に正しく判断し、行動することがいかに重要か再認識する機会としたい(以下の日時は、年の記載がないものは全て2009年)。

II. 10年前に何があったのか、その経緯は

当時、神戸市保健福祉局長であった私に対応した経緯を中心に書かせていただく。

<1. メキシコでの発生から日本における水際作戦まで(4月25日~5月15日)>

- ・4月25日の土曜日。携帯メールで、「メキシコと米国で豚インフルエンザが発生した模様、国から連絡があり情報収集している。」との連絡が、部下の局幹部から入った。「豚?鳥ではないの?」「東南アジア、でなく、メキシコ?」との戸惑い(※1)が最初。

※1 戸惑いの原因は:致死率の高いインフルエンザは、「鳥」から由来し、人から人へと感染するインフルエンザを想定。「豚」は致死率が高いのか?低いのか?前提が違うと対応が異なる。

- ・翌26日の日曜日には、ともかく既存の新型インフルエンザを想定したマニュアルに沿って「保健所健康危機管理連絡会議」の開催、「相談窓口の設置」ホームページ掲載、「医師会等関係機関への情報提供」などを行った(※2)。麻生総理(当時)が封じ込めのため水際対策を指示したとの情報もネットニュースでもたらされていた。

※2 対策準備を進めていた神戸市:神戸市では2005年3月に、国の「平成16年度新型インフルエンザ対応検討小委員会報告書」を参考に、「新型インフルエンザ対応マニュアル」を策定。その後、国の行動計画などを基に、2006年11月に「神戸市保健福祉局新型インフルエンザ対策実施計画」を作り、2007年8月、2008年1月と改定して神戸市全体の計画へと格上げを重ね、さらに改定作業を実施中であつた。また、2008年11月に訓練もおこなっていた。

- ・4月28日(火) 世界保健機構(WHO)がフェーズ4(※3)、舛添厚生労働大臣(当時)会見、感染症予防法の「新型インフルエンザ」に位置付けられ、政府基本的対処方針(※4)を決定・発表。神戸市「新型インフルエンザ対策本部」(以下「対策本部」という。)を設置、1回目を開催。

※3 WHOフェーズ(2009年パンデミック発生当時)とは:段階とか局面を示す言葉で、新型インフルエンザの流行の段階を表している。フェーズ1~3は大部分の感染が動物、わずかに人への感染が見られる段階、フェーズ4は人から人への感染が持続している段階、フェーズ5~6は人の感染が広範囲に広がる段階(パンデミック)。

※4 基本的対処方針とは:基本的な取り組みの方針、様々に取り組む施策の方向を示して全国的に統一した対策を行おうとするもの、法律で規定していないことなど状況に応じて方向を示すもの。

- ・4月29日(水) WHO緊急会見(フェーズ5へ引き上げ決定)。「新型インフルエンザ(豚インフルエンザH1N1)に係る症例定義及び届出様式について」国が通知(※5)。神戸市発熱相談センター設置。

※5 症例定義とは:病気の症状の事例、新型インフルエンザかどうかを確かめる判断の元になる症状などの基準を定めたもの。「メキシコ等発生国から入国してきた人」という内容が入っていた。

- ・4月30日(木) WHOフェーズ5と指定。午前7時の厚生労働大臣会見で、水際作戦の徹底を指示。第2回神戸市対策本部会議を開催。

—裏面に続く—

- ・ 5月1日（金） 厚生労働大臣が横浜の高校生感染疑い事例で未明の会見。政府基本的対処方針の改定を発表。第3回神戸市対策本部会議。
- ・ ゴールデンウィーク帰国ラッシュ。
- ・ 5月2日（土）～8日（金） 各地で疑い例の報告相次ぐ。神戸市でも複数の疑い症例を、発熱外来である神戸市立医療センター中央市民病院に搬送。結果はいずれも新型インフルエンザ陰性だった。
- ・ 5月9日（土） 成田空港で、新型インフルエンザの感染者（3人）確認。
- ・ 5月10日（日） 成田空港で停留中の高校生1人の感染が発覚、4人目。
- ・ 5月11日（月）・12日（火） 高校生らの容体とともに、停留措置の状況が報道。
- ・ 5月13日（水） 政府の新型インフルエンザ対策本部専門家諮問委員会開催。厚生労働省は停留期間を7日間に短縮。
- ・ 5月14日（木） 厚労省、高校生のうち3人が5月15日に退院と発表。
- ・ 5月15日（金） 成田空港で発覚した高校生等の停留期間が7日間に短縮。濃厚接触で停留中の47人（感染が確認された高校生と同じ航空機に乗っていた人達）は解放。該当の高校生は検査で陰性が確認できなかったとして、退院延期。神戸市の発熱相談センターには設置からこの日までに1,647件の相談があったが、徐々に減少してきていた。一方、国レベルでは相談が増加・・・24時間相談体制をとるようにとの要請が寄せられていた。

< 2. 神戸市で渡航歴のない高校生が感染発覚「国内第1号」（5月15日～5月28日） >

【中略】

- ・ 5月16日（土）午前1時10分 記者会見 症例1「疑い患者」として発表 午前1時57分 記者会見終了

厚生労働省新型インフルエンザ対策推進本部の課長とも情報交換しながらの対応始まる。

午前3時「新型インフルエンザ対策本部」中核メンバーによる対策会議

午前4時 記者会見 症例2, 3 X高校生「疑い患者」として発表

午前7時 第5回神戸市新型インフルエンザ対策本部会議及び市長記者会見

神戸検疫所長、医師会など外部を含め、本部員約40人や関係部局員も入れると約120人が列席した。マスコミのカメラ等で身動きができない中での会議だった。

【後略】

2009年新型インフルエンザ — 「国内初！」事象の経緯と課題・教訓—

神戸学院大学 客員教授

元 神戸市保健福祉局長

櫻井 誠一

※内閣官房本部ホームページ (https://www.cas.go.jp/jp/influenza/kako_05.html) より抜粋

和歌山で初めて患者が出た時のことを思い出します。私が用事で四箇郷連絡所へ行ったとき、偶然そのTVでニュース速報を見たのです。よそ事に思っていたことが身近に感じられた一瞬でした。治療法も特效薬もワクチンも何もかも手探りの中で、みんなが先の見えない不安でいっぱいだった状況は、今と全く同じでした。

この騒動は結局大事には至らず、過熱していたマスコミ報道も冷め、次第に世間からの関心もなくなり、徐々に記憶から薄れていきました。しかしあの頃から、『手洗い・うがい・せきエチケット』が言われており、予防の手立てはやはりこれが基本だということを今回再認識したわけです。

さて、上記の櫻井氏の言葉を借りると、「改めて10年前を振り返り、発生時に冷静に正しく判断し、行動することがいかに重要か再認識する機会としたい。」ということを実感しています。

（前号と同じ言葉ですが）『想定は悲観的に…』ということが肝要。備えあれば憂いなしです。

そこで保護者の方々にお知らせとお願いです。

学校へ来校される際は、「手洗い・うがい・せきエチケット（咳エチケットとは、感染症を他者に感染させないために、咳・くしゃみをする際、マスクやティッシュ・ハンカチ、袖、肘の内側などを使って、口や鼻をおさえることです）**」への配慮をしていただければ幸いです。**

また、厚生労働省から出された、新型コロナウイルス感染症についての相談・受診の目安の「1. 相談・受診の前に心がけていただきたいこと **○発熱等の風邪症状が見られるときは、学校や会社を休み外出を控える。○発熱等の風邪症状が見られたら、毎日、体温を測定して記録しておく**」こともご留意ください。

なお、新型コロナウイルス感染症に関する情報は、本校ホームページにも掲載しています。